ウィルキー・コリンズ（作）
「船長と島の美少女」

松　岡　光　治（訳）

「船長はまだ脂の乗った人生の盛りなのに」と未亡人が言った。「船乗りをやめてしまわれました――収入は十分あるのに、生活をともにする相手がいらっしゃらないのです。どうして結婚されないのか、できれば知りたいものですわ」

「わたしに対して船長は、それはもう無礼でしたよ」と、未亡人の妹が同調するように言った。「ロンドンで船長とお別れする際に、今年の社交シーズンはブライトンで合流される、そんな可能性がございますかって尋ねてみましたの。ところが、わたしがひどく怒らせたみたいに、船長はぷいっと背中を向け、こんなふうに奇妙な返事をされました――『私は海を見るのが大嫌いです、お嬢さん！』ってね。あの方はずっと船乗りでしたのに、一体どういう了見で、海を見るのが大嫌いだなんて、おっしゃったのかしら？」

この質問はその場にいた別の第三者に向けられたものだった――そして、この人物は男性である。彼は完全に未亡人とその妹の言いなりになっていた。この家の他の姉妹たちは――その場にいたら彼を守ってくれていたかもしれないが――今宵はコンサートに出かけて留守だった。実は、これは船長の友人で、船長の人生に起こった出来事をよく知る人物と思われていた。そうした出来事の記憶をよみがえらせることに、二の

足を踏む理由がいくつか友人にはあったのだが、女性に対する礼儀を考えると、思い出す以外に残された道などあるだろうか？　話すのをためらって未亡人とその妹を失望させ、さらに悪いことに、もっと彼女たちの好奇心を増大させてしまうか、船長が結婚しようとしない理由や（船乗りだったのに）海を見るのが大嫌いな理由を語ってしまうか、そのどちらかしか彼には選択肢がなかったのである。この家の姉妹は二人とも若くて美人だった――こともあり、彼女たちが懇願した相手は（男性であったので）、エデンの園で初めて示された女性への服従の例にならうことにした。ということで、船長の友人は次のような話をし、姉妹たちの疑問を解いてくれることになった。

＊　＊　＊　＊　＊

英国商船フォルトゥーナ号は、日付を詳しく記す必要もありませんが、朝潮に乗ってリバプール港から出帆しました。この船は紫檀（したん）――当時、中国王朝ですぐ金になって非常にもうかる市場を見出していた商品――の積み荷を求め、とある太平洋の群島に向かっておりました。

船主たちは大半を船長の自由裁量に任せていましたが、それは彼が信用できる男だっただけでなく、海の生活での暇な時間に苦労して様々な能力を身につけた類まれな男であることも知っていたからです。彼は船長としての務めに全身全霊をささげていましたが、貪欲な読書家であるばかりか、語学の達人でもありました。太平洋諸島の住民たちの間で相当な経験を積み、彼らの性格を注意深く観察しながら、複数の方言まで習得してしまったのですからね。これによって入手できた貴重な情報のおかげで、船長は一度も困ることなく島民たちを手なづけることができました。他の船長たちが失敗した状況下で、彼が紫檀の積み荷をうまく

手に入れたことも一度や二度ではありません。

こうした取り柄がありながら、船長は人間としての欠点も人並み以上に持っていました。例えば、自分が眉目秀麗であること――明るい栗色の髪の毛、頬(ほお)ひげや美しい青い眼、色白の肌を意識しすぎていましたからね。それを見た女性の多くが羨望にも似た気持ちでほめていましたよ。形のよい手は手袋でいつも保護され、天気のよい日はツバの広い帽子で顔に太陽が当たらないようにしておりました。香水の好みも非常にうるさい人で、強い酒は絶対に飲みませんでしたし、タバコの臭いもいやがっていましたよ。高級船員や乗組員たちの中でも新米連中は、彼が船室で欠点ひとつない見た目になるまで、きちんと服を着こなし、手と顔を洗い、ブラシで整髪した姿――優しい声で言葉を慎重に選び、余暇には勉強に専念する船長の姿――を見ると、学校の先生と伊達男(ダンディー)という相反するものが混ざったような指揮官に、海上にいる自分たちは完全に身を委ねることができると思ったそうです。しかし、どんなに小さな規律違反があった時でも、嵐になって商船が危機に瀕していると分かった時でも、船長は手袋をしたままで鉄の杖を握り、風と波の音を貫いて甲板の端から端まで聞こえるように、あの優しい声を響かせたとのことです。彼の声を通して出された命令が商船を救うものであることは、どんな愚かな船乗りでも理解できたことでしょう。様々な才能に恵まれた男が船長としての生活を通して周囲の者たちに与えた印象は、総じていつも同じものでした。彼のことが好きな連中も少しはいたようですが、みんな彼を尊敬していたものの、その実像を見抜いていた者は一人もいませんでした。とはいえ、こうした結果を受け容れる度量の広さが船長にはありました。相変わらず読書だけでなく肌の保護にも余念がなかったので、船主たちも彼と握手する時は、その手袋を我慢するしかありませんでした。

フォルトゥーナ号は、壊血病にかかった場合に必要な食物補給と給水

のために、リオ・デ・ジャネイロに寄港しました。ほどなく、最古参の乗組員でさえ今いる高緯度の地域では経験したことがないような好天に恵まれ、ホーン岬をぐるりと回ることができました。ところが、ダンカーフという商船の一等航海士が――大酒飲みで、顔をぎらつかせ、呪いの言葉を無尽蔵に吐(は)き、ゼイゼイと息をするくせに、妙に自信たっぷりの老練な船乗りなのですが――「気に入らんな！」と言い放ちました。「お前ら、オレの言葉をよーく聞けよ！　何日もせんうちに船長の頬ひげが取れちまうぐれえの嵐になるぞ！」

何事もなく一週間、商船は船主たちが指示していた群島を探しながら進みました。しかし、その一週間が終わる頃だったでしょうか、予想どおり嵐が船長の頬ひげに対して無礼なことをし始めたのです。それで、ダンカーフは正真正銘の預言者であることが、彼を敬愛する乗組員にとって明らかになりました。

三日三晩、フォルトゥーナ号は嵐を受けて、風と波のなすがままに疾走しました。四日目の朝、突風も吹きやみ、正午頃に太陽がまた姿を現わしたので、船長は現在地の経緯を知ることができました。その結果、太平洋のどこか、彼のまったく知らない所にいることが判明し、会議のために高級船員たちが船室に呼ばれました。

商船内の身分に従って、まず助言を求められたのはダンカーフでした。彼の意見は簡にして要を得たものです。「お前ら、この船はな、魔法をかけられとるんだぞ。オレの言葉をよーく聞け、いいか。何日もせんうちにオレたちが勝手知ったる場所へ戻れるよう、祈らんといかんぞ」――この意見では、言い換えると、太平洋のどこにいるか、ダンカーフも上官の船長同様さっぱり分っていなかったことになります。

夜明けとともに、海図には記されていない、すばらしい緑の島が遠くに姿を見せました。それはサンゴ礁に囲まれた島で、望遠鏡を通して見ると、火山でできたような、頂上のとがった山が中央にあります。それ

を見て、ダンカーフは朝酒としてラム酒の水割りを飲み、二日酔いの頭を振りながら、「あの島は気に入らねえな、お前ら！」と言った（というか、毒づいた）のですが、船長の意見は違っていました。彼は商船に設置されたボートの一つを海に降ろさせると、お伴をする四人の乗組員たちと一緒に武装してから、朝日を浴びながら島の探検に出かけて行きました。

サンゴ礁の縁に沿って進むと、自然の作った入江が見つかりました。それはボートだけでなく、必要ならば商船までも通過できるほど幅が広く、深さも十分でした。それで、波の穏やかな幅の広い海峡を横切り、金色に輝く島の砂浜へ近づいたのです。そこには素敵な貝殻がたくさん散らばっており、肌の浅黒い島民たちが集まっていました。男も女も子供も、みんな息がつけないほど驚いて、見知らぬ者たちが上陸するのを見ようと待っていたのです。

船長はボートを沖合に停め、島民たちを注意深く観察していましたが、彼らはみんな無邪気で素朴な人たちで、踊り、歌い、海の中へ走りながら、すばらしい白人の訪問者たちに向かって、上陸してくださいといった様子で手招きしていました。誰ひとり武器などは持っていません。お客をもてなしたいという好奇心で島全体が活気づいていました。男たちは耳に心地よい言葉で「食事をどうぞ！」と叫び、丸ぽちゃで黒い眼をした女たちはみんな笑いながら、「キスさせてください！」と歓迎の言葉をかけているではないですか。こんな誘いを拒むことなど、普通の人間にできるでしょうか？　船長が先頭になって岸に上がると、たちまち女たちが取り囲み、彼の頬ひげ、きれいな顔、そして手袋を見て歓喜の声を上げました。このように、遠い北の国から来た船乗りたちは、自分たちが新たに発見した島で大歓迎を受けたのでした。

＊　＊　＊　＊　＊

船長のポリネシア方言に関する知識は、島の原住民たちに自分の言うことを理解してもらえるのに十分なものでした。彼は、酋長の案内で島を探検したことで、ここが驚くほど自然の美しい、土地が肥沃な場所であることを自分の目で確認したそうです。この島には不毛の地が一ヶ所だけあるが、それは火山の頂上で、そこは砕けやすい岩でできていたようです。もともとは間違いなく溶岩と火山灰であったものが、時の経過とともに冷えて固まったのです。見たかぎりでは、山頂の噴火口はもう活動していなかったとのことです。しかし、酋長の言葉に対する船長の理解が正しければ、彼は過去に何度か地震と噴火を経験したことがあるようで、幼少時代の記憶に残っているものもあるそうです。

船長は次に実益という考慮すべき問題に話を移しました。島には商船に十二回ほど積み込めるだけの紫檀の木があり、原住民たちは玩具や装身具が全員に行き渡るならば、喜んで手放すだろうとのことでした。一等航海士ダンカーフの顰蹙（ひんしゅく）を買うことになったのですが、その日、フォルトゥーナ号はサンゴ礁の内側に移され、自然が作った港で日没前に錨（いかり）を下ろしました。翌朝から半日間の休養が――こうした場合は船長が先のことを考えて制約を課すものですが――船乗りたちに与えられました。その休養期間が終わると、貴重な紫檀の木を伐採して船に積み込むという仕事を間断なく続けることになりました。

フォルトゥーナ号の整備が済むと、ダンカーフが初夜当直に就きました。彼は自分と同じ老練な船乗りである甲板長を人のいない所へ連れて行き、しゃがれた低い声で「おい、お前、ここは船主連中の出帆命令書に記されてねえ島だぞ。命令書に背いたとなりゃ、何日もせんうちに災難が降りかかる、そうに決まっとる」

その夜は、そのような災難が何も起こらなかったものの、翌朝は日の

出とともに怪しげな事件が発生したので、ダンカーフは甲板長に「オレが言ったとおりじゃねえか！」とささやきました。船長は、原住民たちの酋長が来て船室でさしで話し合いをしたあと、自分が戻るまで陸地側と接触するのを全員に禁じてから、突然、酋長のカヌーに乗って二人だけで商船を離れて行きました。

そのあと、酋長は黙ったまま小さな軽装ボートを漕ぎながら、サンゴ礁内の穏やかな波を越えて、島の中でも船長がまったく知らない地点で上陸しました。二人が島の峡谷を渡り、その先の高台を登ると、酋長はそこで立ち止まり、静かに海の方を指さしました。

指さされた方向を見た船長は、もっと小さな別の島が南西側に横たわっているのに気づきました。彼は背中につり下げていたケースから望遠鏡を取り出し、その島をつぶさに観察してみました。原住民のカヌーが二つほど新たに見えた小島の沖合に浮かんでいます。カヌーに乗った男たちは、みんなへんてこりんな姿勢でひざまずくか、うずくまっているように見えます。船長が望遠鏡の視界を変えると、今度は白い衣装をまとった、背の高い、ひとりぼっちの男が見えました。この小島で見つけることのできた唯一の住人です。その男は岩だらけの岬のもっとも高い地点に立っていました。足元では火が燃えています。時には厳かに両腕を天高く上げ、時には青い煙が出ている火の中に何か目に見えない燃料をくべ、時には岬の下に浮かんでいるカヌーに対して目に見えない何か別の物を投げ落としていました。カヌーに乗っていた原住民たちは哀れなほど服従的に体をかがめ、それを大切そうに受け取っています。船長が望遠鏡を下に降ろし、振りむいて酋長に説明を求めると、すぐさま説明してくれました。英国からの訪問者である船長の解釈に従えば、酋長の言葉は次のようになります。

「すばらしい白人よ！　あそこに見える島は聖なる島、あれ自体が禁忌（ダブー）の地――神々にささげられて聖別された島です。岩の上におられた

立派な御仁は、全能で神々のみこころにかなった方で、職業は呪術師、身分は司祭様です。ご覧いただけるように、ひざまずいて好天や豊漁を祈っている漁師たちのカヌーの中に、あの方は魔除けやありがたいものを投げ与えておられます。もし誰か、よそ者であれ原住民であれ、不敬な人間があの島にあえて足を踏み入れようとしたら、普段は平和を好む私の家臣たちが（宗教的な務めを果たさんがために）その人間を殺すことでしょう。この点をあなたの部下たちに伝えてください。聖なる島に近づかないかぎり、島の男たちからは飲食のもてなしを、女たちからは寵愛を受けるでしょう。命を大切にしたければ、この禁止令を彼らに必ず守らせてください。こうした共通理解でよろしいですか？　すばらしい白人よ！　私のカヌーが待っています。戻りましょう」

それで、高級船員と部下たちは本島に上陸して休養をとったわけですが、ダンカーフだけは例外で、船から離れるのを断固として拒んでいました。半日の楽しい休養の間、みんな島の男たちからは飲食のもてなしを、女たちからは寵愛を受けることができました。しかし、そのあとは島の新しい友人たちによる酒池肉林（フレッシュ・ポット）と抱擁から情け容赦なく引き離され、本腰を入れて紫檀の木の積み込みに取りかかりました。ダンカーフは積み込みの監督をしながらも、船主たちの命令に背くことから災難が生じるに違いないと確信し、その災難を今か今かと待っていたようです。

＊　＊　＊　＊　＊

奇妙なことに、形勢はまたしても一等航海士ダンカーフの見方に有利なものとなりました。彼が予期した災難が本当に起こってしまったのです。その切っ掛けとなった人物はハンサムな若い原住民で、酋長の息子の一人でした。

この心の優しい聡明な若者を船長はとても気に入っていました。暇な時間を利用して島の方言を勉強する際には、この酋長の息子を家庭教師にし、お返しに英語を教えてやっておりました。こうした付き合いをするようになってから一ヶ月以上が経過し、積み荷の作業も最後の段階に来ていた――ちょうどそのとき、運が悪いことに、二人の話題が聖なる島のことに及んだのです。

「あの島には司祭様以外には誰も住んでないのかい？」と船長が尋ねました。

酋長の息子は周囲をうかがうように見ました。「誰にも言わないって約束してください！」と話し始めた彼の顔は真剣そのものでした。

船長は約束しました。

「実は島にもう一人いるんです」と青年がささやき声で続けました。「一度でも見さえすれば、目の保養になること間違いなしの美しい女性ですよ！　司祭様のお嬢様です。幼い頃、あの小島に移されてからというもの、一度も島から出たことがないんですよ。あの神聖な孤島では、他に二人の人間――彼女の両親――しかいません。カヌーから彼女の姿を見たことが一度ありますが、彼女に気づかれないように、あの聖なる土地に近寄りすぎないように注意してました。ああ、旦那様、なんて若い、ああ、なんて綺麗な人なんでしょうか！」と言って、酋長の息子は歓喜の表現として自分の両手にキスしながら彼女の説明を終えました。

すてきな船長の青い眼が輝いていました。その日はもう青年への質問をやめてしまいましたが、あとで彼は望遠鏡を持って、聖なる島を見渡せる高台まで黙って出かけました。次の日も、そのまた次の日も、彼はこっそり忍び足で同じ場所に行きました。運命を決する天が船長の味方をしてくれたのは四日目のことです。とうとう島の美少女を発見したのです。

この美少女は、船長がすでに父親の姿を見ていた岬にひとりで立ち、

コキジバトのような飼い慣らした小鳥たちにエサをやっていました。望遠鏡を通して見えた彼女は、白い衣装をまとっており、それが海のそよ風ではためいています。長い黒髪は足もとまで垂れ、ほっそりした若々しい肢体はしなやかそのもの、あちこち振りむいて小鳥たちの要求に応じている姿は、それはもう純真そのもので、しとやかでした。少女の前には青い海が広がり、背後には緑したたる島の森林がそびえています。船長は目と腕が痛くなるまで望遠鏡でずっと見ていました。彼女が小鳥たちを引き連れて樹木の間に姿を消すと、彼は溜息をついて望遠鏡をたたみ、「天使を見る思いだ！」とつぶやきました。

その時から彼は人が変わってしまいました。元気がなくなり、押し黙ってしまい、どんなことにも興味を覚えなくなったのです。船上のみんなの意見は彼が何かを患っているということで一致していました。

それから一週間すると、高級船員や乗組員たちは市場のある中国への航海について話し始めるようになりました。船長は出航日を決めるのを拒み、決定するように求められると腹を立てさえしました。それで、その夜は船室で寝る代わりに、陸に上がってしまったのです。

それから何時間もしないうちに（ちょうど夜明け前でしたが）、甲板上の船室でいびきをかいていたダンカーフは、突然、肩に手を置かれてハッと目をさましました。すると、まだ明かりがついて揺れていたランプに照らされ、恐怖で引きつった酋長の息子の浅黒い顔が見えました。英語を少し習得していた青年は、取り乱したような身ぶりを交え、この一等航海士に断片的な言葉で理解してもらおうと必死でした。能なしのダンカーフは何も理解できなかったので、甲板の反対側にいた二等航海士に声をかけました。上官と違って若くて聡明な二等航海士は、商船にもたらされた恐ろしい知らせを正しく理解できました。

船長は自分の定めた規則を自分で破っていたことが判明しました。彼は夜の闇にまぎれて機会をうかがい、カヌーに乗って密かに瀬戸を横切

り、聖なる島に行ってしまったのです。その時に彼の近くにいたのは酋長の息子だけでした。この青年は船長の命がけの企てをあきらめさせようとしたのですが、無理だったので、カヌーを漕ぐ音で船長が戻ってくるのが分かるかもしれないと思い、むなしく岸辺で待っていたそうです。熱に浮かされた船長が禁忌の島に足を踏み入れたことは、当然ながら疑問の余地もありません。

船長の命を救う唯一のチャンスは、商船が港を出るまで彼のしたことをひたすら隠しておき、（その間に何も危害が彼に及ばなければ）夜の帳（とばり）が降りてから救出することでした。そのために、船長が本当に病気になって船室に閉じこもっている、そうした噂を広めることに決まりました。酋長の息子は優しい船長に心酔していましたから、この任務を彼に安心して任せ、親切な友のために秘密を守らせることができました。

翌日の正午頃、商船を沖合に出そうとしましたが、風がなかったので無理でした。うだるような暑さが一時間ごとに増しましたが、やがて日が傾くにつれて西の空は不気味な様相を見せ始めました。昼間は、船長に会いたいとか、商船が突如として出航の準備を始めた理由を知りたいとか、そうした好奇心で騒いでいた原住民たちも、みんな一緒に海岸にやって来て、警戒心を抱いて空を見ておりました。ちょうど真夜中でしたでしょうか、まだサンゴ礁の内側の安全な停泊位置にいた商船が、突然、竜骨（キール）から一番上のマストに至るまで激しく揺れました。ダンカーフは、驚愕した顔の乗組員たちに囲まれ、暗闇の中でも島が見えるかのように、節だらけの握りこぶしをそちらに向けて振りながら、「お前ら、オレが言ったとおりじゃねえか！　地震の衝撃だ！」と言いました。

翌朝になると、それまでの空の不吉な様相も予想に反して消えていました。陸地から吹いてくる熱い微風が商船になんとか舵をきかせるのに必要な速力を与えてくれたため、ダンカーフは沖に乗り出すチャンスを得ました。この一等航海士自身が舵輪をとったフォルトゥーナ号はゆっ

くりと、なかば帆に風をはらませ、なかば漂流するように、広い海に乗り出したのです。ところが、島からなんとか二マイルほど離れた所で急に風を感じなくなり、その日はもう船を動かすことができなくなりました。

夜になると、ボートに乗って行った船長を追いかけよ、という命令が出るのを部下たちは待っていました。とても暗い夜の闇、無風による暑さ、さらなる地震の衝撃（今回は陸地から離れた商船の中だったので、かすかに感じただけでした）が、一等航海士に警戒の必要性を感じさせました。「なんだか災難が起こりそうな、そんな雰囲気だぜ」とダンカーフが言いました。「もっと天気が安定するまで、じっと船長は待たなきゃならんのに！」

しかしながら、翌日になっても何の変化も起こりませんでした。死のような静寂と無風による暑さが続いただけです。しかし、日が暮れるにつれて、別の不気味な現象が見えるようになりました。望遠鏡を通して見ると、細い線状の煙が本島の山の頂上から昇っていたのです。火山に噴火の恐れがあるのでしょうか？　一等航海士自身は噴火を信じて疑いませんでした。「くそったれが！　あの島は木っ端みじんになっちまうぞ！」とダンカーフがどなり声で叫びました。「どんなことになろうが、今晩、船長を見つけ出さにゃならん！」

＊　＊　＊　＊　＊

行方不明になった船長は何をしていたのでしょうか？　その日の夜、乗組員たちが彼を見つけ出す可能性はあったでしょうか？

船長は、身の安全を確保する計画など立てもせず、危険に伴う結果など歯牙にもかけず、大胆不敵な企てに我が身を委ねていたのです。目に

した魅力的な美少女のことが昼も夜も脳裏を去りませんでした。人間社会から隔離された孤島に住む純粋無垢な少女というイメージが、頭に強く焼きついていたのでしょう。それは、通りすがりの女性を見て、男性が踵(きびす)を返して追いかけたいという衝動に駆られ、一瞬の気まぐれで自分の将来の運命が決まってしまうようなものです。船長は浜辺で見つけた最初のカヌーに乗り、後先を考えずに禁忌の島へと針路をとったのでした。

まだ暗いうちに向こう岸に着いた船長は、一つだけ分別のあることをしていました。カヌーを隠して、夜明けになっても居場所がばれないようにしたのです。そうしてから、森のはずれで朝になるのを待ちました。

ゆらめく夜明けの光によって、周囲は神秘を感じるほど深閑とした場所であることが明らかになりました。森林の外側に沿って、最初はある方向に、次は別の方向に歩いてみても人のいる形跡はなかったので、彼は島の内部へ突入することに決めました。森林の中へと入って行ったわけです。

一時間ほど歩くと地面が盛り上がった場所に来ました。そこを登り続けていると、いつの間にか彼は海を見渡すことができ、草が生えた大きな崖の頂上に立っていました。崖の上に戸口の開いた小屋があったので、彼は用心深く中をのぞいてみましたが、もぬけの殻でした。家庭用品がいくつか散乱しており、片隅には木の葉っぱで作った簡易ベッドがありましたが、どれもこれも粒子の細かい砂ぼこりにまみれていました。まごまごしながら夜の鳥たちが屋根裏の空洞から飛び出し、眼下に見える森林の暗い影の中に避難して行きました。この小屋に人が住まなくなってから、しばらく時間が経っていることは明らかでした。

船長が開いた戸口に立ち、次に何をすべきかと思案していると、森から一羽の鳥が飛んでくるのが見えました。それはコギジバトで、とても人に慣れていたので、パタパタとはばたいて彼のすぐ近くまで来ました。

それと同時に樹木の間から優しい笑い声が聞こえるではありませんか。彼は心臓の動悸が速くなり、何歩か前に進んで立ち止まりました。すぐさま白い衣装をまとった例の島の美少女の姿が見え、はぐれてしまった小鳥を追って崖を登ってきていたことが分かりました。彼女は見知らぬ男を前にして、あまりの驚きに棒立ちになってしまいました。目の前に急に現われた美しい眺めに心を打たれて動けなくなったのです。船長は笑みを浮かべて手を差し出しながら近づきました。彼女は微動だにせず、びっくりして突っ立っているだけ――美しい黒い眼は魔法にかかったように彼の顔に釘づけになり、浅黒い胸は着ている衣装の縮んだ襞（ひだ）の上で震え、ふくよかな赤い唇は驚きで物も言えずに開いたままでした。押し黙ったまま彼女の美しさで目の保養をしていた船長は、しばらくしてから思い切って島の方言で話しかけてみました。自分に理解できる言葉で話しかけてくれる男の声に、この美少女は体をびくりと震わせ、次の瞬間、ハッとして彼の近くに歩み寄ると、その足元にひざまずきました。

「父は目に見えない神々をあがめております」と彼女は小声で言いました。「あなたは目に見える神様でしょうか？　母がつかわせたお方でしょうか？」と尋ねながら、彼女は背後にある無人の小屋を指さしました。

「母が亡くなった場所で」と彼女は続けて言いました。「あなたは姿をお見せです。子供のわたしに姿をお見せになられたのは、母のためなのでしょうか？　美しい神様、神殿にいらしてください――父の所に、どうか！」

船長はそっと彼女を地面から起こしてやりました。父親に会ったりしたら、それこそ身の破滅でした。

熱に浮かされてはいましたが、船長は自分の身分を明らかにするぐらいの――遠い国からやって来た普通の人間であると名乗るぐらいの――思慮分別は残っていました。少女は恐怖に襲われた表情で即座に後ろへ

引き下がりました。

「この方は父とは少しも似ていない」と彼女はつぶやきました。「わたしとも似てない。ひょっとすると、嘘をついて神様のお告げをする悪魔かしら？　島の破壊を運命づけられた人かしら？」

船長は、これまでの女性に対する経験から、自分が今いる厄介な状況から確実に抜け出す方法が一つしかないことを知っていました。それは自分の容姿に訴えることです。

「ぼくが悪魔に見えるかい？」

目と目が合って、かすかな笑みが彼女の口もとに浮かびました。「島の破壊を運命づけられた人」というのはどういう意味か、彼は思い切って尋ねました。彼女は片手を厳かに挙げ、神様のお告げを繰り返して説明してくれました。

聖なる島はいつの日か海岸に現われる悪魔によって破壊される恐れがあるとのことでした。その災難を避けるために、この場所は神々と司祭様の保護のもとで聖別され、聖域となっていたのです。これが禁忌の島となった理由、禁忌令が異常なほど厳しく守られている理由でした。船長はこの上なく興味を覚えて彼女の話に耳を傾けていましたが、その間ずっと彼女の手をとって優しく握っていました。

「ぼくの手は悪魔のような感触がしますか？」と彼はささやいた。

彼女はほっそりした浅黒い指で彼の手を遠慮なく握りました。「柔らかくて、心地よい感触です」と、彼女は恐れを知らない子供のように素直に言いました。「ギュッと握ってみてください。気持ちいいわ！」

次の瞬間、彼女はサッと手を引っ込めました。突然、彼の身に迫っている危険が心に浮かんだからです。「父があなたの姿を見たら、神殿から合図の狼煙（のろし）を上げるでしょう。そうなれば、みんなが本島から駆けつけて、あなたを殺してしまいます。カヌーはどこにありますか？　ダメ！今はまだ昼です。海上に出たら、すぐ父に見つかってしまいます」と言

って、彼女は少し考えてから彼に近づき、その肩に両手を置きました。「日暮れまで、ここにいてください。父はこちらに決して来ませんから。母が亡くなった場所を見るのが怖いみたいです。ここにいれば安全――ですから、日没までここにいるって約束してください」

船長は確約を与えました。

不安が取り除かれたので、気持ちの変わりやすい少女も生来の陽気さ、心地よい快活さ、優しい心を取り戻しました。彼女は、知らない小鳥が自分の所に飛んできたら、他の小鳥たちと一緒にかわいがって見とれてしまうように、この美しい見知らぬ男性に対しても見ほれてしまいました。彼女は彼の美しい色白の肌をなでながら、「自分もこんな肌であればいいのに」と言い、光沢のある自分の長い黒髪の大きな束を持ちあげ、船長の明るい色の巻き毛の房と比較し、髪の毛の色を交換したいと心の底から願っていたようです。彼の衣装も彼女には驚きでした。懐中時計は思いも寄らなかった驚愕の品物で、彼女はそれを耳に当てられている間ずっと、彼の肩に頭をのせたままで嬉しそうにカチカチいう音を聴いていました。少女の温かくて、しなやかな体がそっと船長に寄りかかっていたので、その馥郁(ふくいく)たる息が彼の顔にかかり、それに従って彼の腕が次第に彼女の腰のまわりに伸び、唇が彼女の頬にそっと触れました。彼女は驚きながらも嬉しそうな表情で顔を上げ、「ありがとう」と自然児の少女らしい無邪気な言葉を発しました。「もう一度、キスしてください。いい気持ち！　わたしがしてもいいですか？」

彼女が初めてのキスをしていると、飼い慣らしたコキジバトが彼女の肩にとまったので、はぐれたハトを追いかけるために後に残してきた他の小鳥たちの方へ注意がそれてしまいました。「さあ、わたしの小鳥たちを見に来てください。森のこっち側で飼っているんですよ。あなたが反対側で姿を見せないかぎり、何も危険なことはありません。わたしの名前はエイマータ！　エイマータがあなたのお世話をいたします。ああ、

なんて美しい、白い首なんでしょう！」

少女はめでるように腕を船長の首にまわしたので、彼も優しく彼女を片腕で引き寄せました。こうして、二人はゆっくりと崖を下り、葉が生い茂る森の静かな場所に消えて行きました。例の飼い慣らしたコキジバトが、つがいのハトにクークーと鳴きながら、翼の生えた愛の使者として二人の前をはばたいて飛んでいました。

＊　＊　＊　＊　＊

夜になりましたが、船長は島を離れていませんでした。

夜陰に乗じて彼を島から送り出すというエイマータの決意は、すでに忘却の彼方へ消え去っていました。彼女は、崖の上の小屋にじっとしてさえおれば、まったく危険はないということを彼に納得させてから、父親がまだ眠っている夜明け時に彼の所に戻ってくると、別れ際に約束してくれました。

船長はひとりで小屋に残っていましたが、愛する無邪気な少女のことが、愛情だけでなく悲哀も伴って、心に浮かんできました。軽率にも禁忌の島に来てしまったことを後悔するところだったのです。「あの娘を一緒にイングランドへ連れて帰ろう」と、彼はひとり言をつぶやきました。「世間の評判なんて船乗りが気にするものか。エイマータを妻にしよう！」

彼は厳しい暑さにすっかり参っていました。それで真夜中に風のそよぎを求めて崖の上に出てみました。その時のことです。商船がまだサンゴ礁の内側にいた時に乗組員たちが体感した、あの地震の最初の衝撃が船長の立っている地面をまた揺るがしたのです。彼は即座に本島の火山のことを思い出しました。噴火口は活動していないと思ったのは間違い

だったのか？　彼が今しがた感じた衝撃は、二つの島が海底でつながっているために伝わる火山からの警告だったのでしょうか？　船長は、論理的に考えても退けることができない不安をぼんやりと感じながら、何時間も暗闇を通して成り行きを見守っていました。東雲（しののめ）の光が見えると、彼はすぐに森へと降りて行きました。すると、島の美少女が――彼女の安否は彼にとって自分の安全と同じように大切になっていたのですが――急いで樹木の間を走り抜け、彼に会いに来ているではありませんか。

彼女は近づきながら取り乱した様子で手を振っていました。「逃げて！島が破壊される前に、自分のカヌーで逃げてください！」

船長は必死に彼女の不安を鎮めようとしました。恐れているのは地震の衝撃なのか？　いいえ、地震の衝撃なんかではありません――地震に続いて恐ろしいことが起こったのです。神殿の近くに湖があって、そこの水が地下の灼熱で温められたようです。湖は地震で盛り上がって、水は煮えたぎるように泡立ってから、地面に溶けて消えてしまいました。美少女の父親は、この前触れを恐ろしそうに眺めていましたが、すぐ本島の火山を見るために岬へ行き、そこで神々の御加護を願って祈りと供（く）物（もつ）をささげていました。

こうした話を聞き、司祭様がおられない時に、水がなくなった湖を見せてくれるようにと、船長はエイマータに懇願しました。彼女はためらっていましたが、船長の影響力は絶大でした。それで船長は彼女を説き伏せ、一緒に森林を抜けて取って返したのです。

森林の反対側にある境界の場所まで来ると、二人は島の中央に向かって緩（ゆる）やかに傾斜している岩だらけの地面の上に出ました。この岩場を横切ると、今度は自然の岩でできた円形劇場のような窪地に着きました。その片側にあった神殿は、掘削されたようにも見えますし、自然の洞窟でできているようにも見えます。そこから横に枝分かれした洞穴の一つが司祭様とその娘の住まいです。そこの入口はすり鉢状の岩層からなる

湖に面していました。湖の縁で身を屈めた船長の目に入ったものは、はるか下で水がなくなった湖底から雲のように浮かんで見える明るい色の蒸気でした。どこを見ても、湖には一滴の水もありません。

エイマータは湖の底を指さしながら、船長の胸に顔をうずめて、「父が叫んでいますわ」とつぶやきました。「あなたのしわざだって！」

船長はドキッとしました。「お父様は知っておられるのかい、この島に私がいるってことを？」

とがめるような視線で彼女は彼の顔を見上げました。

「わたしが告げ口して、あなたの命を危険にさらすと思われますか？父は地震を島の破壊者のしわざだと思ったのでしょう。湖の水が消えたのを破壊の前兆と思ったのです」

彼女の視線は思い焦がれたように彼に注がれたままでした。

「あなたは本当に神様のお告げをする悪魔なのですか？」と、彼女は船長の髪を指に巻きつけながら尋ねました。「たとえそうでも、こわくありません。わたしは魔法にかかったみたいです。悪魔でも大好き——」

島の美少女は彼に熱烈なキスをし、キスとキスの合間に「たとえ死んでも構いません」とささやきました。「あなたと一緒に死ねたら本望——」

船長は彼女に対して理詰めで話そうとはせず、もっと懸命な方法をとりました——彼女の感情に訴えたのです。

「私の国に来て、一緒に幸せに暮らそうじゃないか。私の船が待ってるから、一緒に母国に帰って、君を私の妻にしてあげよう」

彼女は喜びのあまり手をたたきましたが、それから父親のことを思い出し、涙を浮かべて彼から身を引き離そうとしました。

船長には彼女の気持ちがよく分かりました。「この陰鬱な場所から出よう。君が私を愛してると初めて言ってくれた、あの森の涼しい空き地

で相談することにしよう」

彼女は手を差し出して、「あなたを愛してると初めて言った、あの場所ですか！」と、笑みを浮かべて彼を見つめながらオウム返しに答えました。二人は一緒に湖を離れました。

＊　＊　＊　＊　＊

夜の闇がまた迫りましたが、商船は相変わらず風がないために海上で動けません。夕食後、ダンカーフが甲板に出てきました。その日の夕方、火山の頂上から立ち昇っている細い筋のような煙が見えましたが、今では同じ方角から不気味な火柱の閃光が断続的に見えていました。さらに、島の陸地の方から熱い微風が吹いてくるのを体感できました。

「まだまだ、そよ風だぞ」とダンカーフが言いました。「チャンスがあるかぎりは、お前ら、船長を探すからな」

昼間に禁忌の島の状況をすでに確かめていた二等航海士の指揮のもと、ボートの一つが海面に降ろされました。四人の部下たちが彼と行動をともにすべく、全員が完全武装することになり、最後にダンカーフがボートの指揮官に次のような指示を与えました。

「ボートの船首にはな、お前ら、角灯を付けて注意を払うんじゃぞ。もし原住民どもに悩まされたら、どうすりゃええか、分かっとるな。いつでも奴らを撃つんだ。島の近くまで行ったら、大砲をぶっ放して、大声で船長に呼びかけるんじゃぞ」

「その必要はない！」という声が海上から聞こえました。「船長はここにいるぞ！」

フォルトゥーナ号の総指揮官は、自分が部下たちにもたらした驚きを完全無視し、カヌーを漕いで船べりにやって来たあと、甲板に上がるこ

とはせず、船ばたで待機していたボートに乗り移りました。「君のピストルを貸したまえ」と、船長は落ち着いた口調で二等航海士に言いました。「それから、すまないが、部下たちは職務に戻してくれ」

船長はダンカーフを見上げながら、さらなる指示をいくつか与えました。「天気が変わっても、安全な距離を保って、陸地に付かず離れずの状態で船を動かしてくれ。それから、そちらの地点を見失わないように、時おり信号弾を打ち上げてほしい。日の出までには、また船に戻ってくるからな」

「何ですと！　まさか島に戻られるつもりじゃねえでしょうな？――そのボートで――たったひとりで」

「戻るつもりだよ」と、船長は相変わらず落ち着いた口調で答えました。

「このボートで――たったひとりでな」

そう言いながらボートの帆をしぼり、彼はオールで商船を突いて離れて行きました。

「船長の務めを放棄されるんですな！」と、この年老いた船乗りはいつものように大きな罵声を浴びせました。

「指示に従ってくれ！」と船長は言い返し、暗闇の中へ漂って行きました。

ダンカーフは――生まれて初めて激しく動揺していましたが――厳粛さと礼儀正しさが奇妙に入り混じった言葉で、上官である船長に別れを告げました。

「船長に主の恵みがありますように！　お達者で！」

＊　＊　＊　＊　＊

船長はひとりでボートを漕ぎながら、不安な気持ちで本島の火山が発

する閃光を見ていました。

もし形勢が有利に働いていたら、水がなくなった湖底を見た最初の日に、すぐさまエイマータを商船に避難させていたことでしょう。しかし、司祭様の燃やす供物の煙が酋長の目に入っていたので、いくつか質問してこいという指示を受けて、二艘（そう）のカヌーが派遣されました。一艘は戻ってきましたが、もう一艘は司祭様が本島との連絡手段としていつでも使えるように岬の沖合で待機しています。二回目の地震の衝撃は当然ながら酋長の不安を高めていましたので、彼は司祭様に島を離れるように、さらにエイマータにも父親が固辞した場合は娘としての影響力を行使するように、それぞれ懇願する伝言を送っていました。しかしながら、司祭様は神殿を離れてくれません。神々と供物の力を――彼の聖域を脅かしている今回の災難をそらしてくれる力を――彼は信じていたのです。

酋長は司祭様に根負けし、本島の沖合での見張りを交替させるべく増援のカヌーを派遣しました。原住民たちは松明（たいまつ）の助けを借りて、昼も夜も（迷信深いために、偽って神様のお告げをする悪魔におびえながらも）警戒態勢をとっています。そのため、船長は身を隠しながら、自分のカヌーを隠しておいた場所に近づく機会をうかがうしかありません。彼にとって都合のよい機会は、エイマータがいつものように彼のもとを離れ、就寝時に父親の所へ戻ったあとだけでした。夜になると、火山から吹き上がる火柱の閃光がはっきり見えたので、見張りの男たちは恐怖におののいていました。その際に彼らが思いを馳せたのは本島の妻や子供や所持品のことでしたので、誰も彼も司祭様を見捨ててしまいました。この機会に船長は商船と連絡をとり、弱々しくて扱いにくいカヌーと嵐の時でも航行を続けることができる快速の帆かけボートを取り替えました。

船長がやっとの思いで小島の陸地に近づいたとき、小さな赤い斑点がいくつか遠い沖合で動いていたので、見張りたちのカヌーに対して本来の任務に戻れという命令が出たのだと分かりました。

船長は、見張りの明かりを慎重に避けながら、目指していた小島の地点に何事もなく到着し、帆かけボートの角灯の助けを借りて崖の下に錨を下ろしました。それから、岩場を登り、小屋の戸口まで進んで行ったのです。そこの敷居でエイマータに迎えられたのは、彼にとって嬉しい驚きでした。

「何か恐ろしい不幸が起こって、わたしたちが永久に別れる夢を見ました。それで、正夢かどうか確かめるために、ここに来たのです。あなたのおかげで、つらい気持ちがどんなものか、初めて分かりました。これまで――小屋の中をのぞいて、あなたがいないのに気づくまで――胸が痛むのを経験したことは一度もありませんでした。でも、今、あなたに会えて、とても満足です。いいえ、わたしと一緒に戻ってはいけません。父が外に出て、わたしを探しているかもしれませんから。身が危険なのはあなたであって、わたしじゃありません。わたしなら昼も夜も森のことはよく分かっています」

船長は立ち去ろうとする彼女を引き留めました。

「今ここに君がいるのに、どうして今すぐ君を安全な場所に移せないのかね？　私は船まで戻って、帆かけボートを持ってきたんだ。夜の闇が味方になってくれるさ――さあ、今のうちにボートに乗り込もう」

手を握られた彼女は尻ごみしました。「父のことをお忘れです！」

「危険なことはまったくないよ、君。岬でお父様を待ってるカヌーがいくつかあるからね。そこを通る時に明かりが見えたんだ」

そう返事すると、船長は彼女を小屋から引っ張り出し、海へと連れて行きました。その時にはそよ風すら吹いていませんでした。凪(なぎ)が戻っていたので、帆かけボートは大きすぎて、複数のオールを一人の男だけで漕いでも、簡単には動きません。

「そよ風がまた吹くかもしれない」と船長が言いました。「いい娘(こ)だから、ここでチャンスを待ってなさい」

そう彼が話していると、崖の下の森の方から、ひっそりした静寂を破る人の声が聞こえました。「エイマータ！　エイマータ！」と叫んで嘆き悲しんでいる人の声でした。

「父の声ですよ！」と、彼女が小さな声でささやきました。「わたしがいないのに気づいたみたいです。こちらに来たら最後、あなたはおしまい――」

彼女は激しい情熱的なキスをして、しばらく彼を力いっぱい抱き寄せました。

「明け方に戻ってきますから、ここで待っててください」と彼女は言い、崖の下の陸地の斜面を下って姿を消しました。

船長が耳をそばだてていると、父親と娘の声がちょうど樹木の間から聞こえてきました。司祭様の声の調子は決して怒ったものでなく、それは留守にしていた彼女の口実がもっともらしく思えたからでした。親子の声が次第に聞こえなくなったので、一緒に神殿へ戻ったことが分かりました。再び静寂が訪れ、さざ波が浜辺で砕ける音さえ、葉っぱが森の中でサラサラと鳴る音さえ聞こえません。本島の火山が放つ閃光が暗い上空で反射している以外に、何の動きも見えません。無風の恐ろしい静けさだけでした。

船長は小屋の中に入り、木の葉っぱで作ったベッドに横たわりました――眠るためではなく、休息するためです。予想される翌朝の出来事に対処するには、体内の全エネルギーが必要になるかもしれません。商船までボートで往復したことに加え、それに先立って長い見張りをした後だったので、屈強な男の船長ですら休息が必要でした。

ほんのしばらくの間、彼は眠らずに考えごとをしていました。しかし、だるい感じを与える強烈な暑さだけでなく、その影響をいやが上にも増す自分自身の疲労感もあり、意に反して目を閉じてしまいました。この疲労困憊した男は思わず深い眠りに陥ったのでした。

船長は砲兵隊の弾薬庫が爆発したような轟音で目がさめました。本島の火山が突如として噴火したのです。噴煙とともに火柱の光が空いっぱいに広がり、小屋の開いた戸口の中へもパッと射し込んできました。彼が驚いてベッドから飛び出した時には、ひざ下まで水につかっていました。

海水が陸地にまで氾濫してしまったのでしょうか？

この海水の中を歩いて小屋から出ると、海水は彼の腰のあたりまで上がってきました。毒々しい赤味を帯びた噴火の明るさの中で、彼はあたりを見渡しました。視界に入って目に見えたのは、空からの反射を受けて血の色に染まった海が、死の静寂のような無風状態の中で奇妙に渦巻き、小さく波打っている姿だけでした。次の瞬間、彼は自分の立っている大地が足元で沈んで行くのに気づきました。海水が首まで上昇したかと思うと、小屋の屋根は跡形なく消えてしまいました。

再び周囲を見渡すと、突然、事の重大さが分かりました。島全体が沈んでいたのでは――ゆっくり、ゆっくりと火山の深淵部まで、深海のさらに下まで沈もうとしているではありませんか！　一番高い所にあった小屋も、目の前で少しずつ海水の下へと沈んで行きました。魔術を使ったような火山活動の影響でしょうか、島は海面まで押し上げられたあと、同じ影響力を受けて、姿を現わす前の暗い深海へ再び沈んでしまいました。

すべてを破壊する海の苦い水が口の中に入ってきていた船長の方へ、暗い影のようなものが大きな円を描いて回りながら、ゆっくりと近づいてきました。それは波が高まるとともに浮き上がっていたボートでした。錨を引きずっていましたが、島がゆっくり沈む際にできる渦に巻き込まれて漂っていました。エイマータも自分と同じように助かったかもしれないという一縷（いちる）の望みを抱いて、彼はそのボートまで泳いで行き、巨人のような力で重いオールをつかみ、その時の自分にできた最大限の推測

に従って、湖と神殿があったと思われる場所へと向かいました。

船長は何度も何度も周囲を見渡しました。目を凝らして、さざ波が立つ海面の下を見ようとしましたが、泡立っていたので無理でした。カヌーに乗った見張りたちはパニックに陥って、父親と娘を保護しようともせず、自分たちだけ助かったのでしょうか？　あるいは、この親子は二人とも逃げようと努力する前に息の根を止められたのでしょうか？　船長は、まるで底の知れない深海にいる彼女に聞こえるかのように、悲嘆に暮れた声で「エイマータ！　エイマータ！」と呼びかけました。彼の呼びかけに応えたのは、遠くから聞こえる噴火の轟音だけでした。立ち昇る火柱の炎が、沈んで行く島を閉じこめた静かな海を照らしています。ゆっくりと旋回していたボートは、渦が小さくなるにつれ、さらにゆっくりと回るようになりました。あの優しい眼が、名状しがたい愛を込めて、彼を見つめることはもう二度とないのでしょうか？　みずみずしい彼女の唇が、熱烈なキスによって彼の唇に触れることも二度とないのでしょうか？　猛烈な自然の力が互いに激突する中で、この悲嘆に暮れた男は気が狂ったように両手を挙げ、神に哀願しました――が、燃え立つ空が無慈悲なほど華麗な光で彼を照らし、一撃のもとに彼をボートの中でひざまずかせました。彼の理性は手足の衰弱とともに弱まっていました。その一撃のあとに続いた神の慈悲による狂乱状態の中で、彼の目には遠くの方で白い衣装をまとった彼女の姿が見えました。それは波の上に浮いて漂っている天使で、自分のあとに続いて、もっと輝かしい、もっと素晴らしい世界へ来るように手招きしていました。彼はしぼっていた帆をゆるめると同時にオールをつかみました。しかし、急いで追いかければ追いかけるほど、その幻影はあざ笑うかのようにますます急いで、何もない、果てしなく続く海の上を逃げて行きました。

＊　＊　＊　＊　＊

船長が乗ったボートは、翌朝、その姿が商船から発見されました。

フォルトゥーナ号の高級船員たちが不幸にあった総指揮官のためにできることはすべて、帰りの航海中に献身的に行なわれました。自分の祖国に戻って腕のよい医者に助けられ、船長は少しずつ心のバランスを取り戻しました。彼はまた社交界に復帰しています。私たち他の者と同じように生活し、活動し、職務をこなしています。しかし、彼の心は新しい感情にまったく反応しなくなりました。亡くなった恋人の神聖な思い出を除いて、何も彼の心には残っていないのです。彼は女性との交際を求めも拒みもしていません。女性の同情に感謝することはあっても、その魅力は彼にとっては暖簾（のれん）に腕押しで何の効き目もないのです。女性たちの姿が彼の視界から消えると、彼の心からも消えてしまうようです。エイマータの記憶を呼び起こす役割しかないのでしょう。

「これで、お二人とも、なぜ船長が絶対に結婚されないのか、なぜ（船乗りなのに）海を見るのが大嫌いなのか、お分かりですよね」

【原典】

Wilkie Collins, “The Captain’s Last Love” (*The Spirit of the Times*, 1876)